

---

# 駒鳥（きみ）へ、優しい日々を贈ろう

篠崎 伊織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

駒鳥<sup>きみ</sup>へ、優しい日々を贈ろう

### 【Nコード】

N6574M

### 【作者名】

篠崎 伊織

### 【あらすじ】

カヤが幼い時分に、誤って異世界に召喚されてから十年以上がたっていた。

次第に帰る事を諦めていたカヤはある日、魔術師の青年ティーリから、自分と同郷の少女が召喚された事を告げられる。

召喚具の破損の所為で絶対に元の世界に帰れない、『決して異世界の人間だと知られてはいけない』カヤと、幼い日にカヤを誤って召喚してしまつて以来、『彼女の人生を狂わせてしまった』と、贖罪の意識に苛まれているティーリ。

不思議な関係の『加害者』と『被害者』は、いつしか形を変えていたそれぞれの感情に気づくが……。

ぱりんと。硝子の割れるような甲高い音が、子供達の<sup>じだ</sup>耳朵を打った。

いつそ病的なまでに白い肌をした少年と、鎖骨の上ほどまでに黒い髪を伸ばした少女。

淡い光と音を放ちながら、二人の頭上で浮遊していた、歪で小さな<sup>オルゴール</sup>自鳴琴。それは唐突に、向かい合う彼らの間に落下した。

自鳴琴は、石の床にぶつかる衝撃に耐え切れなかったのだろう。箱型の器の中でさえずつていた小鳥の細工物は、地に落ちた拍子に、細く高い音をたてて箱から投げ出された。同時に音色もきしりと鳴り止む。

その一連の出来事を、二人は確かに視界に納めていた。しかし両者とも、その事に大きな反応を示さなかった。

宙に浮いていた自鳴琴。壊れてしまった自鳴琴。

二つが些細に思えるほど、もっと大きな驚きに、子供達は直面していたのだ。

先程まで少女……佳弥<sup>かや</sup>が浴びていた夏の陽射しは、今はもうここにも降り注いではない。

それどころか突然佳弥を取り囲んだ薄暗い部屋の中は、凍えるほどに寒かった。

——自鳴琴の壊れる音で、少女は一気に現実<sup>現実</sup>に引き戻された。そして初めて、自分の吐息が白く曇る事に気付く。

佳弥は思わず両の手で、むき出しの腕をかき抱いた。

「どうして」

佳弥が座り込む、色鮮やかな陣形の描かれた床。それを取り囲む鈍い銀色の光の枠の向こうで、少年は泣きそうに目を見開く。

重ねて纏う藍色と白の裾長の上衣に、濃淡の灰色で施された刺繍。足首までの黒色のズボン、厚手で、彼の装いは見るからに冬のものだった。

どうして、などと。それは佳弥の台詞である。

なぜ自分は室内に居るのだろ。少し前までは間違いなく、通い慣れた通学路を歩いていたのに。

それにこんなに寒い理由は？ だって、今は夏のはずなのに。

疑問は尽きない。けれど今の佳弥には、言葉を音に乗せる事もできなかった。

眼前で呆然と佇む、佳弥よりはほんの少し年上であろう見知らぬ少年。彼が纏う空気の、その面持ちの、何と張り詰めた事か。

驚いているように、最初は見えた。

けれど次第に少年の表情には、焦燥と不安が入り混じりだす。

佳弥が不思議に思っ、てその顔を覗き込めば、少年はその明るい色をした瞳に、僅かに負の感情を浮かべた。

……そんな表情、佳弥は今まで見たことがなかった。

初めて目にした失意の色はどこか美しく、しかし底知れぬほどに深かった。

まだ七年しか生きていない幼い佳弥にさえ、それは絶望というモノだと悟らせるほどに。少年の表情は酷く鋭く、鮮烈だった。

つられるようにして佳弥が心細げに首を傾げると、彼もまたようやく、はっと我に返る。

少年は震える腕で抱え込むようにして持っていた分厚い本を、慎重に傍らの小机に置いた。

そして佳弥の顔を恐る恐る覗き込み、か細くかすれた声で呟く。  
「鳥じゃ、ない」

それは問いかけというには、少しばかり断定的。

どちらかと言えば、彼が現状を認識させるために自分に向けた言葉を、間違えて零してしまったように聞こえた。

「わたしは、人間だよ？ お兄ちゃん、どうして鳥だと思ったの？」

わたしには羽もないのに」

少年のその声が、酷く苦しげに聞こえたからだろうか。

先程とは反対に、佳弥は無意識に口を開いていた。

「ひとの、こを。俺は、」

「——痛い、の？」

けれどもそんな気遣いすらも、知らず少年を追い詰めたようだった。

瞬間顔を歪めた彼に、佳弥はもう一度、気遣うように聞く。

だって今にも、目の前の少年は泣き出しそうだった。彼が取り落とした言葉は、悲痛さを感じさせるほどに必死すぎた。

力なく崩れ落ちるようにして、少年は冷たい石の床に膝をついた。そして恐る恐る、佳弥の方へ右腕を伸ばしてくる。

鉄格子のように天井までそびえていた銀の光の枠は、少年の手が触れると同時にふつと霧散する。

少女が見上げていた少年の顔が、彼女の間近に降りてきた事によって、子供達の距離は近くなる。

佳弥にとって、彼が纏うどこか痛みを帯びた空気は、酷く異質に感じられた。

どこまでも直ぐな、けれどどろりと感情の入り混じった、少年の表情と声音。

暖かく緩やかな日々しか知らなかった少女は、その仄暗さに魅了されてしまったのかもしれない。

少年の白い指が、佳弥の体温と感触を——少女の存在を確かめるかのように、彼女の頬に手を遣った。

冷たい指先に触れられたと同時に、佳弥は静かに、その言葉を音に乗せる。

「泣かないで」

その言葉を本来かけられるべきは、彼女であるなどと、その時はまだ知らなかった。わからないからこそその慰めだった。

少年は何も言わなかった。佳弥もそれ以上、何か続けられはしな

かった。

どこまでも危うげな静寂の中で、子供達の視線が交わる。互いに、今にも綻びそうなその脆い繋がりに、無意識に縋った。

瞳を射るといふにはいささか儚く、絆と呼ぶには似つかわしくない、あまりに弱すぎる関わり。

だというのにどうしてか、子供達は視線を交わらせたまま、逸らす事ができなかった。

一瞬にも、数秒にも、もっと長い時間にも思えたその関係性に、先に耐え切れなくなったのは少年の方。

彼は視線こそ外さなかった。けれども引き結んでいた唇を、空気を求めるかのように僅かに震わせた。

「《籠鏡》は、だって、《駒鳥》を喚びだすはずなのに……！」

意識を集中していなければ聞き逃してしまうだろうほどに、小さすぎる叫びの声。

佳弥がかろうじて聞き取った彼の言葉は、確かに後悔に溢れていた。

けれど彼の悔恨の理由までは、その時は彼女はまだ知る由もなく、これから築かれる関係性は、きつと歪に綻ぶのだろうと。理解しているのは、まだ少年一人だけだった。

王国の西方、魔術師領の片隅。

長の幼い息子ティーリが、無知ゆえに禁を破った冬の日。

ティーリに召喚された小さな《駒鳥》は、たったひとつの帰路を失った。

## 01（後書き）

幼い頃に異世界に召喚されて以来帰れないまま大人になった主人公と、少年時代に彼女を召喚してしまった青年魔術師の中編小説。とかに仕上げられればいいなんて。

雰囲気重視でがーっと書いたので、抽象的だったり曖昧だったりぼんやりしている表現が多いかと思います。が、絡みつく感じの文章を書きたかったので、そこは大きくは直さないかと。

苦手な方はスルー推奨です。ますます人を選ぶ小説になってゆく……。

HDDのご逝去から三ヶ月近くがたって、やっと切り替えられました。

新作です。司書官とくは全く別の世界観。

一作あたりの文字数は変動しそうですが、8章くらいで仕上げられればと思っています。

最後まで書き上げたい。お付き合いくださるなら幸いです。

茜色に染まつた空の下を渡る木枯らしが、店内にするりと入り込んできた。

書棚の間の狭い空間で、幾人かの客の上着や髪が、軽く冷たい空気を孕む。

季節はもう秋の終わりだ。扉に下げられた鈴を鳴らして、新たに枝葉堂に入ってきた青年も、厚手の上着を羽織っていた。

短い焦げ茶の髪は、一筋だけが他とより分けられて肩ほどまで伸ばされており、銀と宝石が細工された髪飾りで止められている。

独特のこの髪型は、魔術師とその縁者の証。髪飾りに石が飾られていればその人物は術師であるし、ただより分け止めたただけであれば、それは術師の庇護者の証だった。

王国では、魔術師は優遇されている。建国に携わって以来、国の守護の一角を担う術師の一族がその筆頭であるが、貴賤を問わず術者たちは、皆人々から尊敬を受けていた。

宝石入りの細工物で髪を止めた青年もまた、そんな術師の一人だった。

けれどもそんな彼に対して、他の店では当然のように響く、「いらつしやいませ」の一言は発せられない。代わりに、店主は彼に向けて「ティーリか？」と、その名前を呼ばわった。

「ジェインさん、カヤはいますか？」

入ってくるなり青年——ティーリは、会計のために入り口の脇に置かれた小机の、その向こう側に座る、古書店の店主に声をかける。ティーリとは旧知の仲である枝葉堂の主ジェインは、彼の口から発せられた名前に「それなら」と、自分の後ろ壁にしつらえられた

扉を示した。

「半刻ほど前に、書庫の棚の整理を頼んだが。もうそろそろ終わるんじゃないか？」

扉の奥は、表の店に収まりきらない古書を保存する部屋になっている。ティーリがそちらへ意識を向けると、なるほど、確かに薄い扉の向こう側からは、人の気配と共に小さな物音が聞こえていた。

「そうですか……確か今日は暮れの刻まででしたよね？ 彼女の勤務時間」

「ああ。もうそろそろだな。迎えに来たのか？」

ジェインが「今日は学院の方で騒ぎが有ったって聞いているぞ」と、少し心配そうに聞いてくる。

ティーリは軽く頷くと、曖昧に話題を誤魔化すように、困ったように微笑んだ。

「はい。ちよつと、用事が出来たんです。心配事も。それで、カヤと話したくて」

「それでか」

ティーリの返答に納得したのだろう。ジェインは椅子に座ったまま片手を伸ばして、扉を軽く叩く。

「カヤ、途中でもいいから出てきなさい」

先にそれなりの理由を話してしまったからだろう、ジェインから更に理由を聞かれる事は無かった。

ティーリは僅かな安堵に、一瞬表情から色を消す。けれどもすぐに元の貌を浮かべ、待ち人が来るのを待った。

幾分も多々ない内に、戸を叩く音を聞きつけた、枝葉堂のたった一人の店員が扉を開ける。彼女——カヤが「何でしょう」と後ろ手で扉を閉めて出てくると、店主はすぐに会計机の前に立つティーリを示して言った。

「迎えが来てるぞ。今日はもういいから、一緒に帰ってやりなさい」  
今は背中で軽く結われた黒髪と、その内の一筋を他とより分けて纏める簡素な銀細工の髪飾り。

藍色のスカートの上にエプロンを羽織ったカヤは、少し驚いたようにティーリを見た。けれどその場では彼には声はかけない。

「わかりました。それじゃあ、支度してきますね」

ただジェインに返事を返すと、彼女は急ぎ足で書棚の間を通り、店の奥にもう一つ有る扉に消えていった。こちらには店の運営に必要な、羊皮紙やインク等の雑貨がしまわれているのだと、ティーリも以前聞いた事がある。

同時に、従業員の荷物置き場や休憩場所としても使われているのだろう。少し待てばカヤは帰り支度を整えて、扉の奥からまた姿を現した。

店での仕事のためにつけていたエプロンは外され、代わりにゆつたりとした袖の黒色の上着を、藍色のスカートの上に身に着けていた。

ちらほらと居る客達の間を縫って、彼女は足早にティーリの横へ駆け寄ってきた。

「ジェインさん、お先に失礼します」

「はい、お疲れ様。明日も頼むよ」

「ありがとうございます」

挨拶をするカヤに続き、ティーリもジェインに無理を通してくれた礼を言う。

そしてカヤに「行こう」と声をかけると、彼は足早に古書店の扉を開いた。外の冷たい空気に一瞬身を硬くするが、軽く振り返ってジェインに会釈すると、そのまま歩き出す。

会計機の椅子に戻ってひらひらと手を振るジェインに見送られ、ティーリとカヤは街へと出て行った。

――枝葉堂は、王都の学院街に店を構えている。

二人の住居は学院街の大通りから、ひとつ通りを渡った地区に有り、治安もそれなりに良い。大通りの一角には朝と夕に市場が立っし、地理的な不便さはあまり感じない。

だから特に約束もしていないのに、ティーリがわざわざ職場まで迎えに来た事を、カヤは少し不思議に思っていた。

時折は互いが互いの職場まで出向いて帰路を共にしたり、そのまま買い物に出かけたりもする。けれど今日はそのような提案は無かったし、突然に店に来るなどという事も今まであまり無かった。

「ティーリ、どうしたの？ 今日、来るって言ってなかったよね？」半歩前に行く青年の背中に、カヤは不思議そうに声をかける。

けれど通りの喧騒にまぎれて、その言葉はうまく届かなかったのだろう。ティーリはこれと言った返答を返してこなかった。

それでも何か言ったのは伝わったのかもしれない。彼はカヤの左手を躊躇いがちに軽く掴むと、歩調を速める。

その時僅かに背中越しに振り向いたが、すぐに覚悟を決めたように手を握る指にもう少しだけ力を籠め、再び彼は前を向いた。

反応らしき反応と言えば、それだけ。

彼はそのまま通りを横切って、石畳の小道に歩を進めた。

内心首をかしげながらも、カヤは重ねて声をかけはしない。

しばらく二人は、静かな道を進んだ。けれど家に近づくにつれて、次第に歩調はゆっくりとしたものになっていた。同時に指に籠められていた力も弱弱しくなつてゆく。

「ティーリ？ 大丈夫、夫？」

今度こそ、聞き逃す事は無いだらう。

もう一度話しかけると、青年は振り向かずに、けれど今度ははっきりと言葉を返した。

「今日、学院で事故があつた。術式の暴走事故だ。術者は王弟。末王子のウィルトラウト殿下」

その言葉も、返答にはなつてはいなかったけれど。

それでも少しばかり張り詰めた声音は、緊張の色を濃く帯びている。

表情こそカヤからは見えなかったが、無言の時は引き結ばれている口元からは、真剣さが垣間見えた。

「学院つて、じゃあ、お客さん達が話してたのつてその事？」

「話してたつて……。もう、市井にまで伝わってるのか」

「何かあつたみたい、程度しか聞かなかつたけれど」

学院地区に店を構える枝葉堂は、専門書も充実している事もあつて、学生や学者の客が多い。

学院での噂話程度なら、カヤも自然と耳に入っていた。

「そう」

ティーリはそのまま一言発したきり、しばらく言葉を止めた。

やがて彼はゆっくりと歩みを止めると、おもむろに振り返ってカヤに向き直った。

「カヤ。今日学院で、人間が一人、召喚された」

そうして告げられた言葉は、人通りの無い細い小道に、弱弱しくもはつきりと響く。

「喚びだされたのは本人曰く十代の女。外傷は無い。術式暴走で、誤って呪われた形跡も無い。殿下にも召喚の意図は無かつた。事故だつた」

夕暮れの迫る街角で、その言葉に打ちのめされたかのように。

何か、大事なものを見失つたかのように、カヤはゆっくりと瞠目した。

それはまるで、心のどこかに突き刺さつたままの硝子の欠片が、

ゆつくりと痛みを思い出させるように。

「名前はマイハラナツだと、名乗ったって聞いている。俺も召喚分野の研究者だから呼び出された。けど、直接会ってはいない」

「それ、って、」

零れた言葉は、彼女自身驚くほどに淡かった。消え入りそうに小さかった。

だというのに、その音はどこか力強く。

押し込んでいたものが、あふれ出るような感覚に、知らず言葉が詰まる。

ティーリもまた、呆然とした彼女の痛みにも、僅かに顔を歪めた。彼自身はするように、痛みを憶える権利など無いと知っていたけれど。

でも、無理だった。堪える事は酷く難しく。

「……カヤと、同じなんだ」

どちらかと言えば使われた言葉そのものは、事実を認めるだけの言だった。けれども確かに、発されたのは肯定だった。

十二年前、カヤはティーリによって召喚された。

こことは異なる世界から。魔法の存在しない場所から。

幼い夏の日に、突然に故郷の世界から拐<sup>かどわ</sup>かされた。

その時、ティーリはまだ無知だった。知らなかったからこそ、カヤという一人の人間の人生を狂わせた。

当時、齡十を目前に控えていた彼は、使役獣を欲していたのだと聞いた。

だからこそ家の倉庫に眠る、《籠鏡》との名を持つ自鳴琴の形をした魔法具は、酷く魅力的だった。

それは《駒鳥》という使役対象を呼び出すのだと、書庫で読み解いた書物に記されていたのだ。

少年はだから希望を持って、一人隠れて術式を行使した。両親に認めてもらいたかった。

己の体の病弱さと言う劣等感を拭いたかった。

見下してくる級友を、何とか見返してやりたかった。

だから使役獣として、過去使役主に栄光をもたらしたとされる、《駒鳥》を手にしたかった。

けれどその結果、幼い魔術師は破ってはいけない禁を破ったのだ。禁じられているにもかかわらず、知らず人の子を喚び出してしまった。

《駒鳥》は、比喩。『《籠鏡》によって召喚された人間』を指し示す代称だった。

そうしてその時彼は、召喚に用いた魔法具《籠鏡》を壊してしまい——召喚されてしまった幼いカヤは、生まれ育った地に帰る術を、永遠に失った。

魔法具の破損は、カヤを故郷に送り返す事を不可能とした。だからこそ、ティーリのその言葉は、色褪せた思い出を呼び起こさせる。

「召喚された人は。その人は、帰れるの？」

張り詰めた言葉にすぐに、ティーリはこくりと頷く。

それだけは、彼は事故のあった学院に呼び出された時、真っ先に確認していた。

魔法具に破損は無いか。術式は破綻していないか。術者は術式の行使が可能な状態か。

自分で過去に取り返しの付かない失敗をしていた分、それに関しただけは、的確に行動できたと確信している。

「帰れる。魔法具の破損もないし、術者が術者だ。術式の材料も揃えられる」

「そ、か」

途切れ途切れの言葉を零したカヤから、ティーリは無意識に瞳をそらした。

幼い頃のおぼろげな記憶は、カヤを長年苛ませている。

帰りたい、どうして帰れないのかと。今も忘れられずに憶えているからこそ、緩やかに侵食を続ける。

カヤ自身、頭では帰れないと分かっている、それでも心では、そう簡単には認められない。受け入れられない。

やはり加害者であるティーリからすれば、その現れは酷く自責の念を抱かせる。突き刺さるような不可視の刃だった。

「早く、戻れるといいな」

「――、うん」

その言葉は多分、何時までたっても忘れられない、彼女の懐郷故に紡がれた。

だからこそ、なのか。何時までたっても、歪な記憶に縋ろうとする。

カヤはうつむいて続けたティーリを、ただぼんやりと見つめていた。

「召喚方陣の研究要員に、俺も借り出された。ずっと、研究だけは続けてるから」

薄暗さを徐々に増す石畳の道で、繋いだ指に、今度はカヤが力を籠めた。家はもうすぐそこだ。後もう少しで、彼らの住む小さな一軒家の玄関に辿り着くだろう。

それなのに、どうしてだろうか。しばらく足を動かす事ができなかった。カヤも、ティーリも、どちらとも。

背負ってしまったその過去は、どちらにとっても重すぎた。

「彼女は、無事に帰す事ができると、思う」  
痛みにも似た、その優しさに。

一瞬、最後に目にしたあの夏の景色が、うつすらと脳裏を掠めた気がした。

それでもカヤの日常に、これといった変化は訪れなかった。

ティーリは術者として送還術式の研究に関わってはいるが、そもそも彼はあまりカヤに仕事の話をしない。それは宮廷魔術師として機密を守る意味合いもあるのだろうが、召喚魔法に苦い思い出の多いカヤに対して、気を遣ってもいるのだろうとも思う。

だからカヤは時折に召喚事故の事を思い出す事は有っても、それに対して特別思い悩みはしなかった。

忙しくなったティーリの代わりに家事を片付け、ただ単調に枝葉堂で仕事をこなす日々。

それは多少退屈ではあるも、平穏な毎日だった。

「やっぱり、元の世界に帰る事、諦めさせていた？」

だからだろうか。養母からその言葉を聞いた時、一瞬言葉に詰まったのは。

無意識に、書架の整理をする手が止まる。

けれどもカヤの養母——ユフィア・ヴェインはそれを指摘はしなかったし、言葉を繰り返しもしなかった。

数秒の間、沈黙が落ちた。

「……うつん」

カヤは職場の古書店で、書庫の棚の一つに再び手を伸ばしながら、傍らの本棚で古書を探すユフィアに返した。

枝葉堂の主ジェイン・セリエルの、魔術史学の師でもあるユフィア。

彼女はその伝手<sup>つて</sup>で、一般客は入れない古書店の書庫を頻繁に利用できている。

だからユフィアが来た時はカヤも仕事をしながら、ここ数年は頻繁に会えない『親子』の会話を楽しむ事も多い。店主の計らいだった。

しかしその日の彼女らの話題は、貴族社会や魔術師達の間ではそれなりに広まっている、王弟ウィルトラウトの起こしてしまった召喚事故。会話が娯楽となる要素は無かった。それでも二人の関係上、避ける事は出来なかった。

「やっぱり、原因はティーリだし、ファーレンの人達にも責任は、有ったと思う」

そもそもユフィアがカヤが召喚されたばかりの頃に彼女の養母となったのは、彼女がティーリの父方の伯母であつたからだ。当時禁を破った事で困った立場に立ってしまった、幼い甥を案じてだった。それ以外にも、彼女の死別した夫の家系を遡れば、古い時代に存在した《駒鳥》の血族にあたると言う事。そしてユフィア自身が魔術師一族でありながら魔術師ではない、同時に子を得ていても不自然ではなかった人間であつたと言うのも、大きな理由ではあつたが、加害者の身内にして、被害者の身内となつたユフィアだからこそ提示できた話題。逆に言えば、彼女だったからこそ提示せざるを得なかつた話題だった。

ゆっくりと、カヤは言葉を続ける。苦い思いと共に、ある種の開放感を感じた。

ずっと、はつきりとは言えずにいた胸の内を、今なら明かせる気がした。

「でも、お養母<sup>かあ</sup>さん。ティーリやファーレンの人達が、『諦める』  
つて言つた事、一回も無いよ」

建国に携わり歴代の王を助けてきた功績を認められ、古い時代より王国の西方に、自治領を<sup>たまわ</sup>賜っている魔術師一族、ファーレン。

ティーリやユフィアもまた身を置くその家系に、カヤは召喚されて以来ずっと守られている。ファーレンの一員と偽る事によって、即ち佳弥ではなくカヤとして生きる事によって。

「だから、諦めたのは、私が一人で決めた事だよ」

ファールの間では、カヤの存在は有名だった。少なくとも無い人数が、カヤをどうにか故郷へ帰そうと、尽力もした。

だからと言って彼らは一人たりとも、カヤを疎んじはしなかった。こちらが不思議になるくらい、彼女も彼女の願いも否定しなかった。たった一度、カヤを守るためにと、領外では生来の名を名乗らぬよう、彼女の出自を口外しないよう、諭した以外は。

カヤが成人の折に、正式にカヤ・ヴェインとしてこの世界で生きようと決めたのは、そんな彼らの姿勢が有ったからこそ。

「それでも、『翼冠』の故事を持ち出す人間は、魔術師達の間にもまだ居るわ」

ユフィアはそれでも気がかりなのだろう、黒い瞳で心配そうにカヤを見る。

「そうだね。『翼冠』は有名だし、伝承だって割り切ったとしても、十分魅力的だもん」

けれどもカヤだって、幼くして家族と引き離されて、そして十年以上を生きてきた。

それは正しく孤独ではなかったが、時折に孤立を味わい、ふとした事で少しの不安や恐怖のよぎる日々ではあった。

自分の立っている場所が、どんな物か。緩やかにではあるが、知りえてはいる。

一呼吸置いただけでカヤは言葉を返すと、少しだけ瞼を伏せて、書架に再び向き直った。

それを見て、ユフィアもまたするりと一冊の古書に指を滑らせる。彼女は同時に僅かに、何かを思案するような表情を浮かべた。

「カヤ」

おもむろ

徐に、ユフィアは養女に声をかける。今度はしっかりと、カヤが自分の方を向くまで待つて。そして、彼女の瞳を覗き込んで。大切な話だった。そもそもこの話題を持ち出したのもこのためだった。

「マイハラナツも、既に貴族社会の水面下ではあるけれど、望ま

れたわ。何れかの良き王侯貴族の妃に、って」

ユフィアのその言葉に、カヤは思わず瞠目する。

——伝承と古史によれば、『冠が《翼》を掌中に収めると、国家に安寧が訪れる』のだと言う。

《翼》はやはり、《駒鳥》と同じように、召喚された者を指し示す言葉だ。ファーレン一族の有する《籠鏡》を使って召喚された者のみを《駒鳥》と呼ぶのに対し、《翼》はその方法や手段を問わず、召喚された人間を指す。

つまりは、権力者が召喚された人間を庇護するなり困うなりすれば、国が平和になると言われているのだ。そして《翼》と権力者の距離が近ければ近いほど、それは顕著になると、言われている。

それに、実際召喚された《翼》達は、王国では珍しい知識や発想によって、親しい者に富をもたらし事も少なくはなかった。そう、今は故意の召喚を禁じられている彼らが、多く召喚された嘗ての時代の資料には記されている。

事実、その事もあって王国は過去、平和な時代を謳歌したのだらう。

だからこそ、その故事になぞらえてしまえと。

王弟に召喚されたマイハラナツを、わざわざ送り返さずに掌中の駒としてしまえと、そう主張する国家の重鎮達もいるのだと、ユフィアは言った。

勿論、《翼》には《駒鳥》も含まれる。だからこそカヤは権力者に利用されない為に、《翼》の一人であることを明かしてはならなかった。召喚された人間だとは、カヤの為に、彼女を隠し守ったファーレンの為に、魔術師領の外の人間には決して知られてはならない事だった。

「でも」

カヤの声には僅かに、憂いが混ざっていた。

ユフィアは貴族の令嬢の家庭教師も勤めている史学者だ。

そして、同時にティーリと同じ魔術師一族、ファーレンの出であ

るも、術者とはならなかった女性。彼女からの情報だ。間違っているとは思えない。

だと、いうのなら。

「彼女は、帰れるんでしょう？」

カヤがファールレンの一族に守られて逃れたその道を、マイハラナツに歩けと望む人々は、そんな未来を思い描いているのだろうか。

棚から古書を取り出しながら、「そうね」とユフィアは答えた。

「帰れはすると思うわ。ウィルトラウト殿下もマイハラナツ自身も、少なくともそのつもりらしいし」

ユフィアはカヤがこの世界に召喚されて以来、彼女が異世界から喚び出されたと公に知られないために、ずっと魔術師領から国家に提出する書類上の、実母の役を買って出ている。

カヤがこの世界の生まれでないと、閉鎖された魔術師領外へは洩らさぬために。

「カヤは、何も悩まなくていい。私達が、ちゃんと隠すわ」

何を、誰を、とは言わなかった。けれどカヤを隠して、その存在を利用しようとする人々から、守ると。言われなくても彼女がその事を指しているのは、嫌でも分かった。

その一言は常々、養母から養女へ、加害者の身内から被害者へ、向けられている言葉だったのだから。

「うん」

書架の整理と言う仕事を続けながら、カヤはそれだけ言ってゆつくりと離れて行ったユフィアに、小さく返事をする。

ありがとうとも、それは当然のことではないかとも、考える事すらできなかった。

だって、マイハラナツが逃がされなかったと聞いて。カヤが当たり前のように受け止めていた、自分は逃がされているのだと言う事実を、彼女は改めてかみ締めさせられた。

「でも、お養母さん<sup>かあ</sup>」

カヤは一瞬手を止めて呟いた。

マイハラナツは、その召喚を秘匿されず、その存在を利用しようと言う人々の思惑に晒されていると言う。

対してカヤは召喚された時にまだ幼く、同時に召喚主が独立自治権を持つ魔術師領の、その統治者一族の長の息子だった。同時に一生をこの世界で生きていかざるを得ない状況に、その時点で立たされていた。

カヤは召喚されたわけではなく、ユフィアの実子——魔術師一族ファールンの一員だと偽る事で、彼らの手で守られた。

同じように召喚されたマイハラナツが守られなかったと、その事実は、心のどこかで思っていた『あたりまえ』にひびを入れた。思い知った。気付かされた。カヤは帰りたいと、いくら喚いたって帰れない。けれど不幸せなのではないと。本当に、彼らに守られてきたのだと。

幸せかと聞かれたら、それは言葉に詰まるけれど。それでも言葉に迷うくらい、贖罪ゆえであつたとしても、大切にされているのだ。「隠されてばかりじゃ、何時までたつたて手が届かないよ」

養母の言葉が、心の底で澱<sup>おり</sup>のように深く淀んだ。

守られている事に、だからこそ笑っていられた事に、きっと気付かないふりをしようとしていた報いだ。

手を伸ばしても、その陽だまりにはきつと届かない。だつてカヤは鳥籠の中で、ただ守られる日々を受け入れてしまった《駒鳥》だ。憧れた世界は、いつかカヤの手から離れて行った、緩やかな平常に似ていた。

## 04（後書き）

間が開いてしまいましたが、二章目の投稿です。

こちらの更新は章をすべて書き上げてからになりますので、少々ゆっくりになるかと思います。

一応、先日立ち上げました創作小説サイト「リルの記憶」の方で細切れにですが、先行公開を行っております。

マイページにもこの小説のトップにも、リンクを貼らせて貰っています。

最近、ティーリが家に帰ってこなくなっていた。

ティーリはカヤを召喚してしまった責任を、多少なりとも取ると言う事で、成人の日からカヤの庇護者を務めている。したがってカヤもティーリの庇護下に在る。

その事もあつて二人は、幼い日々を過した魔術師領から王都に越してきて以来、学院街の貸家に同居している。

そこに甘やかな空気は一切無い。しかし幸か不幸か、長い時間を共有していた彼らの間には、ある種の連帯感が有った。人生を狂わせた相手だとしても、憎み疎んじ続ける事は難しい。それに、恨むべきではないとの理解も納得も、カヤだつてとうにしていた。

だから、カヤも彼が帰宅しないことを心配した。

行き先は分かっている。今回の事故で特別に王弟ウィルトラウトに割り振られた、学院の研究室だ。

彼は朝も早い内から出かけていって、そのまま真夜中過ぎまで帰ってこない。そして数時間仮眠を取って、また出かけていくのだ。そんな生活を続けていたら、体を壊してしまうのではないか。

そう思ってきていた矢先の事だった。

カヤは先程から少しの荷物を手に、ティーリが籠もっているのであろつ研究室を探していた。

事前に事務所に立ち寄つて、位置を記したメモは貰っているが、学院は広く入り組んでいる。

幾人かの学生達とすれ違いながらメモに頼つて進んでいけば、少し迷いはしたものの、やがてそれらしき一角に辿り着いた。

学院の東の塔、その中庭と通じた一階部分を、どうやらティーリ

たち送還術式の研究班は使っているらしい。

けれど教えられた部屋の扉には、『許可無き者の入室を禁ず』などと書かれた張り紙がしてあった。

許可無き者、とはどこまでを指すのだろう。

学院の許可？ それとも研究者達の許可だろうか。不用意にノックして、研究の邪魔をしようのも気が引ける。

「あれ？ どちら様？」

しばし迷っていると、不意に後方から声がかかった。

カヤが少し驚いて振り返ると、声の主は首を傾げつつ聞いてくる。「何か御用ですか？」

黒い瞳に、短い黒い髪。カヤと同じ色を持つ、カヤよりは少し年下の少女だった。

貴族の娘が着るようなゆったりとしたドレスを纏っており、学院の者にはあまり見えない。節制を説く学院の生徒や職員は、例えば王族であろうとも学院内では華美な装いは慎む。だからカヤも少し不思議に思ったが、けれどはつきりと返事を返した。

「身内の者が、こちらに居るはずなんです。届け物をしたくて」

ティーリは同居人であると同時に、『従兄』でもある。養母ユフィアがティーリの父親の姉なのだ。

カヤのその言葉を聴くと、少女は笑顔で「あ、じゃあどうぞー」と、張り紙の貼られた扉を開けた。

「ウィルさん、お客さん！」

そして室内に声をかけ、中へさっさと入ってしまう。

研究の邪魔になるのでは、とカヤは思ったが、けれど少しでも室内の研究者から何の文句も聞こえてこなかったたので、遠慮がちに彼女の後に続いた。

室内は、術式の記述だろうか、羊皮紙にこれでもかと記されたメモの類や、事典や専門書を始めとする本、様々な魔術の材料で溢れていた。

方陣を敷く為と言うのも有るのだろう。研究室は広く、奥の石の

床だけは綺麗に片付けられていた。

室内の人影はまばらで、二、三人ほどしか見当たらない。先程の少女は部屋の奥で栗色の髪的青年に、何やら咎められながらも話をしており、カヤは先にティーリを探そうと視線を巡らせた。

すると部屋の隅、円卓に据えられた椅子の一つに、見慣れた青年を見つける。

うつむきながらも真剣な眼差しで書に視線を滑らせているティーリは、手元の頁を捲りながら、時折に傍らの羊皮紙に文字を記していた。

カヤがゆつくりと近づくと、彼は不意に気付いて顔を上げる。

「ティーリ、元気？」

「——カヤ？ え、何で」

「三日も帰らないんだもん。流石に心配になったから来たの」

ティーリの顔には、疲れが色濃く浮かんでいた。心なしか、少し顔色も悪い気がする。

「ねえ、ちゃんと寝てるの？ 食事は？」

少し不安になって聞いてみると、彼は「一応」とこくりと頷く。

「あ……。言って、なかったつけ、そう言えば。学院の寮を借りられているんだ。一昨日から。食事も食堂で食べてる」

「それで、帰ってこなかったんだ」

ティーリの言に、カヤは少し安心したように、ため息混じりに微笑した。

「でも、『一応』じゃ駄目だよ。ちゃんと食べて、休んでね」

学院の寮を借りられた事は聞いていなかったが、彼に悪気はなかったのだろう。時々こういう事がある。研究に没頭している時は、特に。

しかし幼い頃は病がちであったティーリは、今でもあまり体力が無い方だ。だと言うのに研究に没頭すると途端に寝食を忘れ、ひと段落着いてから少しした頃に、一気に体調を崩す。

これまでも何度か似たようなことがあったから、その点は心配

だった。

「心がける」

ティーリはそれだけたゆげに言うつゝ、一度のびをして席を立った。

その時だった。先程の彼女が不意にこちらに気付いて、栗色の髪  
の青年と一緒に寄ってきたのは。

「殿下」

彼女が伴ってきた青年の姿に、ティーリは無意識に姿勢を整え  
いた。その一言で、カヤにも分かった。

王族の容姿の特徴は市井にも出回っていたし、絵姿も時折店で見  
かける。栗色の髪に青色の瞳の彼は、まさしく王弟なのだろう。

「ファーレン殿の、ご家族か？」

「ええ。従妹です」

王弟——ウィルトラウトはティーリを姓で呼ぶと、カヤについて  
聞いてきた。

肯定すると、横で少女が「ほらね？ 私が言った通りでしょ？  
ちゃんと関係者だよ」とウィルトラウトに言葉を発する。

同時にカヤが慌てて王弟に一礼すると、彼は「お気になさらず、  
《剣》のお身内」と、穏やかな声でそれを制した。

どうやら、先程の彼らの会話は、カヤについてらしかった。「ど  
うして勝手に見知らぬものを研究室に入れたのか」などと、王弟が  
少女に問いたてもしたのだろう。何となく、そう浮かんた。あな  
がち間違っではない気がする。

「わかったから。だが、誰の身内かも確かめなかっただろうに」

「……ごめんってばあ」

カヤとティーリを前にして、二人はそんな言葉を二言三言交わし  
た。

しかしすぐにウィルトラウトは少女をたしなめる事に区切りをつ

けると、「《剣》方、失礼した」と、軽く謝罪し二人に向き直った。  
——ファールレンは、別名を《水底の剣》と呼称される、国家の  
柱である魔術師一族だ。

王族と言えど、その一族には敬意を払う。ウィルトラウトはその  
慣例に倣ったのだろ。ティーリの従妹であると、即ち《剣》の一  
族の一員であると示されただけのカヤにさえ、軽くではあつたが礼  
を返した。

「私はウィルトラウト・サシャ・ラーデリアと。兄王陛下より、ラ  
ーデリア公爵の位を拝命している」

王弟にして公爵である高位の貴人が、丁寧に名乗りまでする。そ  
れが国家の守護の片翼を担い続けている、ファールレン一族の価値だ  
った。

その一族に、不都合だからと排除されもせずに迎え入れられたカ  
ヤは、やはり幸運だったのだろ。利用だつてされなかった。ただ  
守られただけだった。

ウィルトラウトの言動が唐突に、先日のユフィアの言葉を、それ  
を聞いた時に感じた感情を、カヤに思い出させた。

「あ、私は舞原奈津、じゃ、なかった。ええと、ナツ・マイハラッ  
て言います！ あ、ファールレンさん、でいいのかな？」

同時に傍らの少女も、慌ててカヤに言ってくる。もう、耳にする  
事は無いと思っていた、故郷のその響きを混ぜて。

黒い瞳、黒い髪。懐郷の度に幾度も夢見た、その、音律。

彼女が、今回召喚された《翼》なのだろう。先程から少しずつ得  
ていた符号は、瞬間ぴたりと当てはまった。

——まだ。咄嗟に言葉に出てきてしまうほどに。あの故郷の世界  
と近い所に居るナツが、正直、羨ましかった。

カヤは一度だけゆるりと瞬きをすると、しっかりと彼女の瞳を  
見据えて返した。

「いいえ、父は、《剣》の一員では有りませんでしたので」  
ティーリが傍らから、すっと眼差しを遣ってきたのを、視界の片

隅で僅かに捕らえる。

彼がすこし心配そうにしていたからだろうか。逆に、カヤは微笑して、はっきりと言葉を音にした。

「カヤ・ヴェインと言います」

名乗った名前は、養母に貰った名前だった。一年前の成人を機に、己の物と認めた名前。

そうして名前を告げてから、ふと気付く。

どうしてだろう、カヤがこの世界に遣ってきて、初めてナツと言う、故郷に繋がる糸が見えた。

だと言うのに浮かんた思ひは、懐かしさではなく、染み渡るような羨望だった。

「あ、そうだったんだ……間違えちゃったね。ごめんなさい」

「ヴェイン殿、わざわざいらっしゃったと言う事は、何かご一族の方で問題でもあったのだろうか」

「ああ、いえ。私がかヤにしばらく帰宅しないと伝え忘れていて。心配して、来てくれたただけなんです」

ウィルトラウトとナツは、カヤの動揺を察しはしなかったようで、そのまま幾つか言葉を繋ぐ。

それにはティーリが主に受け答えた。

同郷であるナツの存在から思い起こされる過去の追憶は、確かに懐かしい故郷での、幸せだった頃の記憶だった。

けれどそれはすぐに苦い記憶と、同時に当時の苦しさばかりだった想いもまた呼び起こす。帰れないと、両親や友人にもう会えないと知った時の、幼い日の葛藤と涙。

そんな心中が少しだけ、表面にも出ていたのだろう。気付いてくれたティーリの心遣いがあった。

だから少し過保護かと思ひながらも、カヤはそれに甘えて、彼の横で内心とは裏腹な、柔らかな表情を浮かべて立っていた。

——もう一度、あの世界に触れられる彼女を羨ましいと。彼女が示す故郷の片鱗に懐古を憶えるのではなく、どうしてか、カヤは懐

かしい世界に憧れを抱いた。

故郷への慕わしさは、時間がたちすぎたからだろうか。いつの間にか彼女の中でゆっくりと、故郷の世界の価値と共に、その形を変えていた。

「魔術師領って、どんな所なんですか？」

ナツがカヤに興味深げに聞いてきたのは、冬の中ごろ、学院の食堂での事だった。

今は食事時を少し過ぎた昼下がりであつたから、周囲に人は少ない。また、幾つか設置されている暖炉には控えめながら魔法火が灯っており、食堂内は暖かく保たれている。

学院へ訪れる事が徐々に習慣となっていた少女二人の服装は、季節の移ろいと共に冬のものへと変わっていた。

——カヤは最初に研究室に赴いたあの日以来、暇を見つけては学院に訪れていた。

学院の寮で生活を始めたティーリへ、彼の日用品を渡しにきたり。彼が《剣》の一人として所蔵している稀少な学術書や魔道具を、研究室に届けにきたり。その都度ティーリとは時間を見つけて、少しばかりではあつたが会話を楽しんで。

そんな風に頻繁に研究室に顔を出すようになったカヤが、やはり頻繁に研究室に訪れるナツと、少しずつ言葉を交わすようになったのは、ある種当然の事だったのかもしれない。

「どんな所、って言うത്？」

「んー、西のほうにある自治領、っていうのは聞いたんだけど……それ以外はあんまり知らないから。でも、カヤさんやティーリさんが育った所って、ウィル様も言ってたし。あと魔術師領って珍しい名称だなんて、ちょっと気になって」

休日を利用してティーリの様子を見に来ていたカヤは、今日もまたナツに食事に誘われて、ちょうど昼食を取り終えたところだった。学院の食堂は、学内へ入る許可さえとれば、自由に利用できる。

カヤは「そうだなあ」と少し思案すると、思いついたことをぽつぽつと語り始めた。

「特徴を挙げるなら、閉鎖的、かな。領の内外を行き来する規制が、他より厳しいの。やっぱり魔術研究の要にもなってる場所だし」

とはいっても、魔法研究の盛んな場所は他にもあるが。ゆつくりと呟くカヤの言葉を、ナツは興味深げに聞いている。

「でも、領の人間がみんな魔術師だってわけじゃなくて。ただ魔術師一族が治めているだけ。後は、他領よりも術師を少しだけ、多く輩出しているくらい」

「あ、じゃあ名前のわりに結構普通だったり？」

「そうですね、私は魔術師領と王都しか知らないけど。でも、こちらもあちらも、さほど変わりはないと思う」

「へえ……」

ナツからしてみれば、カヤは気軽に接することの出来る相手であるらしい。

それはカヤがナツに彼女のもと居た世界についてあまり聞こうとはしなかったからだ、彼女は言った。

聞けば、今までナツは召喚元の世界の事を根掘り葉掘り尋ねられていたという。

カヤが他の人々とは違い、その事について必要以上に尋ねなかったのは、一度離れたから、もうあえては触れなくなかったのか。それともただ単純に、カヤもまた《翼》の一人であると察せられないように、口を滑らせないようにとの警戒心ゆえだったのか。どちらかはよくわからない。

しかしそんな態度は逆に、ナツにとって望ましいものだった。届け物をした帰り、学院の食堂で食事を共にしたりだとか、その時に歳が近い事もあって、おしゃべりに花を咲かせたりだとか。

彼女らの交流は、季節が移り変わる間もずっと、細々とはあったが続いていた。

「そつえば、カヤさんは魔術師じゃないですよね？」

「うん、まあ。——どうして？」

ナツが唐突に言うのを聞いて、飲み物のカップを口に運んでいたカヤは、不思議に思いながらも聞き返した。

「なんとなくだけれど、魔術って便利そうだから。私だったら魔法とか、使ってみたいなーって思うし」

「ああ、そういう」

ナツからしてみれば、魔法とは使ってみたい、などと思えるものらしい。好奇心をくすぐられるのだろうか。

カヤもそういえば、ティーリに召喚される以前は、絵本や御伽噺を通じて魔法に憧れもしていたなど、ふと思いつく。

しかし、カヤも召喚されて以来、分家傍流も含めたファーレン一族の子供達と共に、魔術に関する教育は受けていた。魔術が、ただ単に特異なだけではない事も今は知っている。

「ファーレンの魔術は、基本的に戦闘特化の術式だから」

そう教えると、ナツは「え!？」と声を上げて驚いた。

「私はそういうの苦手だったから、魔術はあまり勉強しなかったんです。ファーレン出身の魔術師となると、軍事研究職か軍人術師って見られることも多いし」

だからこそ、《水底の剣》の呼称だった。

実際ファーレンからヴェインの家に嫁いだユフィアも、魔法史学者とは言え、軍事史にも精通している。

ファーレン一族の他の魔術師だって、三割ほどが正規軍所属だ。

他は宮廷魔術師やら軍病院所属やら研究職やらに採用されているが、そんな彼らでも有事には後方支援を担う。

事実ティーリの父を始め、先の第三次国境紛争ではファーレンの人間も多く借り出された。

「あれ、でもだって、ティーリさんって召喚魔法の研究者ですよね？　それも軍事？」

「まあ、一応。召喚魔法だって、黎明期は戦闘目的で開発されていたし……ティーリだって基本研究職だけれど、何かあれば、ね」

曖昧に言葉を濁して答えると、ナツは驚きを隠さずに目を丸くした。

仕方がないだろう。彼女は今まで、軍隊なんて持たない、平穏な国で生きてきたのだから。

「魔術って、便利なだけじゃないんだ」

ナツは先程よりは少し弱弱しく、ぼつりと零した。

暖炉に灯される魔法火だとか、照明用の魔法光源だとか。そんな生活に役立つ魔術ばかりを見てきた分、衝撃を受けたようだった。

カヤはもう一口、喉を潤そうとカップを口に運んだ。

ナツは何かを考え込むように沈黙している。

本当に。ナツが日々を過してきたあの世界は、あの国は、平和だったのだろう。

カヤがいなくなっただって、あの平穏は変わらなかったのだろう。

突然に居なくなってしまった彼女の周囲では変化はあっただろうが、でもそれだってカヤと関わりの中だった多くの人々にとっては些細な事。

——ナツと話していると、やはり折々に故郷の事が思い出される。それと同時に感じるのは、どこかひんやりと冷たい憧憬だった。悲しいだとか、悔しいだとか、そんな感情よりは薄いけれど。でも確かにそれらも僅かに混ざり合った、絡まった糸の結び目のように、頑なになってしまった心。

少し表情が動くのを、意識的に抑えてまた一口、暖かいカップを口に運ぶ。

「ティーリ」

そうしてふと視線を上にとげると、向かい合ったナツの肩越しに、ティーリの姿を見つけた。

少女の向こう側から、受け取ったばかりなのだろうか、パンと野菜を煮込んだスープを抱え、こちらの方を向いて立っている。

「え？ あ、本当だ」

カヤの呟きに、ナツも気付いたようだった。軽く振り向く。

あまり距離は離れてはいない。カヤがひらひらと手を振ると、少々反応は鈍かったが、彼は少し笑んで、こちらに手を振り替えた。スープは食器に盛られてこそのものの、パンは皿ではなく籠に入れられている。そして青年が足を食堂の出口の方へ進めたのを見るに、研究室に持ち帰って食べるのだろうという事がうかがい知れた。

相変わらず忙しい、と言うか、術式の研究に打ち込んでいるらしい。

「ご飯くらい、ゆっくり食べればいいのに」

ナツが零すと、カヤも「そうだね」と困ったように微笑した。

僅かに見える彼の横顔が、どこか表情を貼り付けた薄い物だと、一瞬感じたのは気のせい、だろうか。

不思議だったけれど、しかしそれ以上、彼女はその事を思いはしなかった。

「あ、ご飯って言えば、なんですけど」

「うん？」

再び、ナツが話しかけてきたのだから。

カヤは相槌を打ちながら、そちらにゆっくりと意識を移した。

それは予兆でもあったのかもしれない。気付いたのは、本当に後になってから。

回廊を挟んで垣間見るウィルトラウトと、その半歩後に行くナツの姿だとか。

カヤとの会話で王弟の話題が出る度、ナツが嬉しそうに笑む様だとか。

確かに、移り変わる日常の中に紛れ込むそんな光景に、彼へ向かう彼女の好意を垣間見たこともあった。

しかしその時は、幾つも季節を経るほどの時間を必要とせず、召喚主に躊躇いなく好意を向ける事、召喚主もまたそれに拒絶を示さないのは、やはり帰る事が出来ると決まっているからだろうか。深く考えず、苦笑しつつも少し羨ましく思っただけ。

——カヤとティーリは召喚当初から、今のような関係を築けていたわけではない。

季節が移り変わる間を、言葉を交わすこともなく、稀にすれ違っても視線を逸らし。

カヤがユフィアに引き取られたことによつて形ばかりの親類となった事実すら、互いに認めようとはしなかった。

そんな風に故意に距離を置いていた相手との間柄が変化し、歩み寄ろうと向き合った切欠となった出来事も、決して喜ばしい物でもなかった。

現在では相手に親愛の情すら持ち、助け合つて穏やかに日々を過ごす事もできている。けれどもそこに至るまでの過程は、いたみにまみれていた。

だからナツが誤つて召喚されたが帰る事はできると聞かされたあ

の時に、『その人はあの苦い思いを感じずに済むのか』とほつとしたのだらうと、カヤは思う。

根拠はきつと、ナツはカヤのように『帰れない』故のくるしみは感じずにすむのだらうという、ぼんやりと浮かんだ単純な考え。

だつて故郷へ帰る事が出来るといふ時点で、カヤとナツの将来も、周囲から向けられる視線や感情も異なるのだから。

つまり彼女と関わつて最初に感じたのがそんな安堵で、次いでは対面した時の本能的な羨望だつた。

ナツはカヤから、何かを奪つていくという事をしなかったのだ。それに奪うどころか、ある意味ではカヤに与えさえした。

召喚があつたからこそ交わしたユフィアとの会話で、気付かされた彼女の甘えと矛盾。

……本当に長い間、被害者だから、加害者だからという言葉と事実を盾に、カヤは彼らから守られるだけの環境を享受してきた。

決して望ましいばかりではない、最初に持ったその関係性に無意識に固執していた。

家族であつても加害者の身内、大切であつても自分を拐かどわかした人間、今や故郷と呼ぶべき土地だけでも、それでもそこは無理やりに攫さらわれて連れてこられた場所だから、なんて。

けれど加害者と被害者と言う関係を引きずつたままでは、少なくともカヤが互いの間にそんな言葉を構えたままでは、どこまでいつても『本物』にはなれないのだと。臃おとろげならもあの時自覚した。

ナツがこの世界に喚こゑばれなかつたなら、きつと養母いへとあの会話を交わさずに、カヤはずつと気づかないままだつたかもしれない。

とはいつても、今自分から壁を打ち壊し歩み寄ろうとするには、少し勇気が足りないけれど。

それでも得たのは大きな実りだつた。

だからこそ、ある種の感謝の念すら浮かんだ相手に、親しみは持ちやすく。

かといつてナツが元の世界へ帰る事は、カヤにとって羨ましくさ

え思うものであったから、やがて行われる送還をただ寂しいとだけ思いはせず。

それは友人にも近い間柄となっている今も変わらない。

冬の間穏やかに、彼らの時間は流れていった。

まるでその穏やかさと対になるかのように、緩やかに少しずつ、その少女の感情が羽化していくのには、誰も気づかないままだった。気付かなかったから、誰もがナツという少女はやがて故郷へ帰って行つて、そうしてそれぞれに元の日常が戻ってくる——そう思っていた。

「でも、今の私の状況って実は、そんなに悪くはないんじゃないかなって思ってる」

もうしばらくもすれば年も開けるだろうという冬の最中。

大きく切り取られた窓辺、陽光のあたる場所に設えられた椅子に、ナツとカヤは半ば向かい合わせで座っていた。

その時カヤとナツが居たのは学院の、ウィルトラウトに貸し与えられた研究室だったが、室内には本来の利用者たちの姿は見えない。ウィルトラウトは公務がある為、今日はまだ学院には来ていなかった。

ティーリと他三人の、研究室に常駐している研究員たちは、先ほどから研究室のすぐ外の中庭で実験の準備に追われている。

送還魔法の術式を、ようやく実験段階まで構築することができたのだ。

カヤはこの朝方、唐突に家に帰ってきたティーリに、

「送還術式の研究、ようやく実験段階までこぎつけたよ」

「術式の実験で、俺が倉庫に貯蔵している鉱石の粉とか、刻印入りの金属片とかが使えるそうだから、取りに来た」

「入手手段が限られてるから、新しく手に入れようとすると時間がかかるんだ。ならいつそ提供してしまおうと思って」

「ごめん、なんか実際に荷物にまとめてみたら、一人で運べる重さじゃなかった。……学院まで手押し車で運ぶの、手伝ってもらえた

りする？」

などと言つ流れて学院まで借り出された。

何でも学院を出てきた時はティーリ自身慌てていたのと、研究室にちょうど手の空いている人間がいなかったので、うっかり重量の目算を誤つて一人で取りに戻つてきてしまったらしい。

カヤとしても今日は古書店の定休日であつたし、何より最近とみに顔色の悪い――けれど頑なに必要最低限以上の休みを取ろうとしないティーリの事は心配だつた。

そういうわけでティーリを手伝つて学院まで来て、せっかくだからと早めの昼食を学院の食堂でとつたのが半刻ほど前。

その間に今日も今日とて学院に顔を出していたナツに遭遇し、彼女に引きずられるがまま訪つた研究室に留まる事となつたのは、至極単純な理由だつた。

人手不足である。

魔術師たちは陽の上つているうちに、やたらと時間のかかる実験の準備だけは終わらせておきたいようで。

そのためには人手は必要で、ただでさえ人数の少ない研究員たちは、できるなら総出で事に当たりたい。

そうなると研究室は無人になつてしまふが、折々に術式の構成をまとめた書類の確認だとか、道具や材料の持ち出しで出入りするため、鍵をかけてしまうのは面倒である。

ならばとばかりに魔術師たちは、送還の当事者であるナツ、そして社会的に信用の高いファールンの一族の一員であるからという理由で力ヤに、形ばかりのいわゆる留守番を任せただ。

少々無理があるのではと思つたが、実験を行うのは研究室の大窓に面した中庭だ。

窓の外からも室内の様子はうかがえるし、部屋の扉の前の廊下は人通りも多い。形だけ室内に誰かが居ればそれで良いらしかつた。

「私、最初はここでの生活、不便な事も多いなつて思つてたんです。元居た世界みたいに、便利な機械や道具なんて全く無くつて」

そういうわけで窓辺の椅子に腰かけていたナツは、肘掛けに腕を立ててカヤに言った。

この部屋にいるようにと頼まれてしばらくもたたないうちに、カヤとナツは常のように会話に花を咲かせていた。

室内には不用意に触らない方が良いものも多いし、かと言って他にする事もないのだから。

学院の研究室だというのに、今自分たちが座っている椅子には、ふかふかとした背もたれまでついている。ウィルトラウトの身分に對し、妙な氣を利かせた者でもいるのだろうか。

そんな事を考えながら、カヤはナツの話を聞いていた。彼女は自分が積極的に話すことを好む。

「でもそういう不便さって、今までが凄く恵まれてきたから不便に思っただろうなって思っただけ。最近はこのに来た事、何で召喚なんてされちゃったんだろうとか、思わなくなっただけ」

「そっか。実りがあつたなら、よかった」

「はい！ 良い事も嬉しい事もいっぱいあつたし、逆に前居た世界より楽しいかもしれない」

にこにこ笑うナツに、カヤも何となく嬉しさと悔しさが、それとも羨ましさが入り混じった感情が浮かぶ。

窓の外に視線をやれば、実験の準備も進んでいるようだった。それはつまり、ナツの送還を執り行える日も——彼女が帰れる日も近いという事。

「ナツさんがそう言うなら、ウィルトラウト殿下も少しはお気持ち晴れるんじゃないかな」

カヤはそう言ったのは、本当に何気なくだった。

對するナツの反応は、少し頬を染めて「そう、かなあ」なんて嬉しそうに笑むという物。

そこまでは、彼女たちの常の会話とさほど変わりはなかった。

カヤもその反応に少し引つかかるところはあったが、それに特別意識が向くほどでもなく。これといって気にせずに、自分からも新

しく会話を繋げようかと口を開きかけた、時だった。

「あの、カヤさん」

「うん？」

ナツが言葉を続けてくる。カヤはいつものように相槌を打ったが、ナツはその後すぐに音を発せずに、間をゆつくりと置いた。

「私、最近思ってる事があって」

たっぷりと時間を待ってから、少女は再び口を開く。

「帰りたい、って、今までは思ってたんです。でも、今は帰りたいとか、思えない」

そうして。

「——え、」

呆然と、軽く瞳を見開いたカヤに、帰る事の出来る少女の差し出した刃は突きつけられた。

「この世界に、好きな人が居るんです」

召喚魔法の術式は、召喚対象の意思を無視する。

けれど送還魔法の術式はその反動であるかのように、送還対象の意思に大きく影響される。

送還される本人に、元の場所に帰ろうという強い意思がなければ、術式は失敗するどころか、暴走してもおかしくはない。

「好きな人が、できたから。彼とは離れたくないから。だから、帰りたくなくて」

背もたれのある椅子に座っていたのは、せめてもの幸いだった。

裏切られたような、見捨てられたような、その感情は突然彼女に覆いかぶさってきた。

まるで体の感覚が、徐々に自分の手から離れていくような錯覚に囚われる。

「なん、」

で。どうして。

咄嗟に口から零れた音すら、うまく繋がらない。

「わがままだっというのはわかってる。私の送還の為に、色んな人が頑張ってくれてるって。この世界には嫌なことだってあるのも知ってます」

ナツもまた、膝の上で握りしめた両手を見下ろしている。けれど彼女の瞳にはカヤと違って、強い意志が垣間見えた。

それでも、と。ナツは繰り返し続けた。

呆然と、いつの間にか体を椅子に預けていたカヤは、泣きそうな貌でその言葉を聞いていた。

放っておけば空白に染め上げられそんな意識を揺り起こしたのは、

カヤの捨てきれない希望、だったのかもしれない。

その時かたりと、部屋の隅から聞こえた物音に反応することも無意識に後回しにして、カヤは二人の間に横たわる沈黙を破った。

「それで、いいの？」

多分、物音や気配には気づいていたけれど、カヤはそれに反応するという行為に、価値を見いだせなかったのだと思う。

「それで本当にいいの？ 後悔しないの？ だって、戻れない、よ」  
一度、ナツが帰らないなどと公言してしまえば、もしかしたら彼女は二度と故郷へ戻れないかもしれない。

今の時代では、貴重な貴重な《翼》だ。富を、栄光を、繁栄を齎す事を望み、彼女を手中に収めたがっている権力者は多い。

それを今まで退けてこられたのは召喚主ウィルトラウトの地位と権力と血筋故であるし、彼がそうしてきたのはナツ本人の希望を尊重して、というのが一番の理由だ。

そう公表されている以上、その前提が崩れてしまえば、後にナツがやはり帰りたいと望んでも、その機会は訪れないかもしれない。

「うん」

震える声で尋ねたカヤへの返答は。

「それでも、私、ウィル……ううん、ウィルトラウトの、側に居たいから。元の世界には帰らない。帰ったりなんか、しない」

しっかりとカヤへ視線を射てきたナツの、どこか甘やかな声音で告げられた。

「だから私、これからもこのままこの世界で、」

「何、それ」

夢見るように続けられた言葉は、けれどそこで遮られたけれど。いつの間にか開かれていた中庭へ続く扉を閉めることもせず、ティーリは室内へ入ってきた。まだまだ冷たい空気が、彼の後を追って入り込む。

先ほどの物音は、どうやら彼が扉を開けた音だったようだ。

それは鋭い物だったけれど、重苦しい虚無感の中で、カヤは聞き

なれた声に僅かな安堵を覚えた。

「あ、ティーリさん、あの」

「なんで——今更、そんなこと」

再びナツの言葉を遮って、扉を開け放ったままこちらへ向かってくるティーリの声音は固い。

彼の金茶の瞳に感情は映っておらず、更に言うならまるで無機質な仮面でも被っているかのように、その貌にもまた表情は宿っていなかった。

「帰らない、とか、ほんとうに？」

しかし繰り返し返した声や口調は焦りの色を示している。同時にそれは何かを恐れるように。

カヤは自分が座る椅子の横まで歩いてきたティーリに、不安そうに視線を遣った。

「ごめんなさい。私の為に、研究頑張ってくれてたのに」

ナツはナツで魔術師に対して気後れでも感じているのか、僅かに彼から目線を外して答える。

「でも好きなんです。ウィル様の事。私、彼と離れたくない。だからもう、送還の魔法も研究しなくていいです」

それを、ティーリに言うのか。

カヤが反射的に傍らの魔術師を見上げれば、一瞬その顔が歪んだように見えた。

「本当はもっと早く私が決意して、言いだしてなきゃいなかった。でももう少ししたら、魔術師の皆さんにもきちんと言おうと思っていました」

彼の方を見はせず、しかしその瞳には強い光を宿して言い切るナツは、きつとその事に気づいていない。

ティーリを案ずる思いからか、それともこちらが縋っているのか。カヤは魔術師から視線をそらすことができなかった。

けれど見上げる彼の横顔は、ひんやりと固い。見ているこちらが、痛みを感じるほどに。

「——そう」

「ティーリ」

カヤが思わず従兄を呼んだのと、彼が吐き出すように言ったのはほぼ同時だった。

僅かに、時間が淀む。

誰も動かなかった。しんと、数瞬の静寂が横たわった。

幾拍かの後に、ティーリは「引き上げる準備、しておいて」と、肘掛けの上のカヤの指に一瞬だけ、かすめるように軽く手を添えて言った。

先ほど咄嗟に立ち上がろうと腰を浮かせかけた彼女を気遣うように。何かを諦めるかのように。

「帰る意思が無い、なら。今用意している実験用の術式も材料も全部無駄になる。外の皆さんには、準備を中止するよう伝えておきます。こちらにいらつしやり次第、殿下にも」

それだけ言い切ると、彼はくると踵を返して早足で中庭へ向かい歩きだした。離された腕にカヤは自然と、座ったまま視線だけでその背中を追う。

凍りかけていた思考はゆっくりと動きを取り戻してきてはいるが、まだ多くを考えられるほど完全ではなかった。

「あ、待って！ でも私、ウィル様には後でゆっくり、自分の口から」

ナツが慌てて立ち上がるが、ティーリが振り返る事はない。

彼女が「だからまだ他の人には」などと、咄嗟に止めようと伸ばす腕を振り払い、魔術師は研究室の扉を開く。そして実験の準備を続ける同僚の元へ、躊躇いもなく言葉を告げにいった。

研究室に残されたのは、閉められた扉に立ち止まったナツと、そしてカヤだけ。

しばしの間、彼女はその場にぽつりと立っていた。カヤも気まずく思いながらも動けずにいた。

かろうじて、どこか歪に穏やかさを保っていた水面に、投じられ

た現実。一投は波紋を生み、告げられた言葉は本人の意図しないところで鋭さを持った。

自分の動揺、きっぱりとした否定、垣間見たティリーの横顔。きつと『最初に示された通りの道筋』でなんてもう進んでは行かないであろう事を、カヤは続けざまに直面したそれらから、緩慢に受け取った。

しんと止まった空気の中で、落胆が重く彼女にのしかかる。だって、カヤと違って帰る事が出来る彼女は、帰りなんかしないと言い切った。そしてティリーにもう送還魔法の研究をしなくてもいい、とも。その二つの言葉が、心に鈍痛を感じさせる。

ただ、くやしかった。

軽やかに吐かれた彼女の言葉は、いつか追いかけた夢を、無意識ながらも切り捨てた。

「どうしよう……」

立ち尽くしたままのナツが泣きそうになりながら呟いた声に、カヤは肘掛けの上に置いたままの手に僅かに力を込めた。

軽くうつむいたままではあったが、そのままのろろと立ち上がる。帰り支度を始めなければならない。

傍らに畳んで置いていたコートを手に取ると、それを視界の端で目にしたナツは、慌ててカヤの方を振り返った。

「私、ファレンさんの事怒らせちゃった、けど。でも私の決めたこと、間違っただけですよね？」

焦ったように彼女は繰り返す。その声音はどこか気まずげではあるが、同時にそれを肯定か、それとも共感でもすることを望んでいるように聞こえた。

腕にコートを抱えたまま、カヤは無理やりに、口元にぎこちない笑みを浮かべた。

「ごめんね」

ずるいと、衝動的に心中に渦巻く感情をぶっけないように、言葉を選んで口にする。

同時にそれを察してほしくはなかったから、表情も取り繕った。

「私にはわからない」

知っているわけ、ないじゃないか。だってそんな可能性なんて、カヤは初めから持っていない。なら考えられるわけがなかった。自分を、彼ら一族を、そして彼を思うなら。

カヤはそれだけきつぱりと言うと、ナツから逃げるようにして、手早くその場でコートを羽織る。そして室内の一角に置いてある自分やティーリの手荷物を取ろうと、彼女はナツに背を向けた。

## 09（後書き）

またここで一区切りです。

次の話から地の文ばかりだったりと、さほど進展が無い文章がまるまる一章分ほど続いていく予定です。

ますます人を選ぶ気がします。が、書いてる自分が楽しければいいかなと思って書いてるので仕方ない。

次の章が終われば一応話の折り返し地点です。が、その次の章がやたらと長くなりそう。

隣に連れ立って歩くも、互いに干渉しようとしなかった。

二人の間の僅かな空間。腕を伸ばせば届くその距離が、ティーリには自分たちを別つ確かな境界線であるように感じられた。

遠回りと承知で、帰路に石畳の小道を選んだのは、賑やかな大通りを避けたから。

かつりかつりと僅かに靴音を響かせながら、隣を往く力やに合わせて、また一歩足を踏み出す。

終わりがけた冬の空気が、身を切るように冷たかった。

——あの後ティーリは力やと共に、学院から立ち去った。

研究室の責任者であるウィルトラウトはまだ学院には来ていなかったが、多忙な王弟に代わって実質的に魔術師たちを取りまとめている年嵩の研究者が、ティーリを帰らせたのだ。突然の実験の中止に術師たちが戸惑う中、彼の様子が不安定であったのと、顔色が悪かったのを心配して。

ティーリはそれに甘えた。やはり沈んだ様子の力やを一人で帰すのは少しばかり不安だったし、もう気力も尽きていた。

唐突に聞いた言葉は、張りつめられて緊張していた系に、突然刃を入れたようなものだった。もしくは大切に、ゆっくりと積み上げてきた何かに唐突に、崩れそうになるほどの衝撃を加えられたかのような。

『元の世界には、帰らない』なんて。

そんな事を言うナツの声が彼の耳に飛び込んできたのは、実験の準備の途中、欠けていた資料を取りに戻った時。

外套を着た上で方陣の配置のためにあちらへこちらへと動き回っていてさえも、冷たく感じた屋外の空気。それに比べ、室内の空気

は暖かく。

けれど耳にした音は、ティーリに表しようのない凍えを感じさせた。

咄嗟の問いに帰ってきた言葉は、しかしティーリの目指すものすらやすやすと否定した。語られる甘い理由と夢見がちな決意で飾り立てられたナツの答えが、彼にとつての贖罪を貶める。

だからだろうか。半ば八つ当たるか仕返すかのように、ティーリは彼女の願いを拒絶した。

—— たった一言でこれほどに挟られてしまっている、そんな自分は本当にどこまでも。

「弱い、なあ……」

そして身勝手。

本当に小さく、零れ落ちた幽かな言葉は誰にも、隣に居るカヤにさえも聞こえていないだろう。それほどに細くかすれた音だったのだから。

石畳を往く足音の方がまだ響くし、聞こえたとしても溜息か何かと思われるはずだ。

弱く、狡く、脆いのだなと思う。

柱に縋っていないと、たやすく崩れ落ちてしまいそうになる。強風に背中を押されないと簡単に歩く事をやめて、背負った荷物も何もかも、すべて捨ててしまいそうになる。

そしてそれらにひびが入れば、すぐに逃げ出してしまうのだ。かなわれないなら相手を刺してでも逃げる。まかり間違っても崩されなんてしないように、と。

そうやって挟られる痛みを知っているというのに、時に誰かの傷口を意図的に抉るのだ。

憎くすら思うほどに、ティーリはそんな自分が厭わしかった。

あの時もそうだった。

一番カヤを嫌っていた、一番嫌いな自分の居たあの過ぎた時間。カヤと向かい合うその以前の幾月かも、自分は傷つけてばかりだっ

た。

ゆるりと連鎖をはじめた回顧に、ティーリは僅かに堪えるように、口元にきゅっと力を込めた。表情が自然と歪む。

そうでもないかと、押し込める感情が言葉にでもなって、溢れ出してしまいうだったから。

……ティーリがカヤを召喚して以来、彼が周囲から向けられる視線は変わった。

魔術師領の領主でもある序列一位の族長、その長男であるというのに、体が弱く折々に病に倒れていた彼の将来を、危ぶむ声は元々多かった。

床に臥せる時間も長かったから、その分他の一族の子供たちと同じようにも学べない。

ゆえにティーリの学ぶ内容は自然と座学が多くなり、同年代の子供たちとの交流も稀で。

最初はそれでもまだよかったのだ。いくらファールンが戦闘特化の魔術師一族とは言え、研究職の魔術師もまた重宝される。知識を詰め込み理論面で秀でる事も、悪くはなかった。

けれども一つ二つと年齢を重ねるにつれて、それはやはり、子供たちにとって理解できない事となっていたのだらう。

儀式や理論を中心とする術式ではなく、戦術に重きを置いた実践に、仮にも長の息子があまり関わらず、また得意としないなんて。

自分たちがこなせる事が、血筋柄自分たちよりも高い魔力を持った長の息子に何故できない。

ただでさえ集団から外れていたティーリだし、個々の得手不得手というものをうまく認められない年代である。子供たちの疑問はすぐに形を歪め、またティーリの元々持っていた劣等感も、それに呼応して重いものとなっていた。

そんな日々が続いていた矢先の、《駒鳥》の召喚、だった。

元々距離を置かれていた子供たちだけではなく、大人たちの視線もまた更に難しい物となり、とうとうティーリは孤立したのだ。

母は多忙で、父は普段は王都に居り、師には距離を置かれ。夫を亡くし帰郷していた伯母は自分が召喚した少女を引き取り、この世界の事を何も知らない彼女に付きっ切り。

自室に籠り、書庫に通い、自分の失敗を取り戻そうと足掻く。そして学べば学ぶほどに、自分が招いた事態を無かった事にするなどできないのだと、決してできないのだと知る。

短くはない期間、当時のティーリはそれを繰り返した。

積極的に誰かと会う事を避ければ、次第に少しは親しかった人々や、多少とは言え気遣ってくれた人々との距離も遠くなっていった。同時にそれ以外に関係性を築いていた人間との繋がりも、以前にもまして捻じれ。

特にそんな現状に陥った契機の象徴である《駒鳥》——カヤとの関係が、どこまでも鋭く薄いものであったのは当然だろう。

ただ召喚によって彼女を強引に拉致した加害者と、唐突に見知らぬ土地に連れてこられて終生帰郷叶わないとされる被害者。

そんな単純すぎるほどに単純で、けれど子供たちからすれば痛々しほどに酷薄な繋がりにかんじがらめになって、幾許かの季節を経た頃だったろうか。

互いに決して接しようとはしなかったティーリとカヤの間柄に最初の転機が訪れたのは、《駒鳥》の召喚から一年ほどの時間がたった——冬の間の事だった。

魔術師領に早くも降った初雪に、子供たちは随分とはしゃいでいるようだった。

領主の城の庭には雪が積もっているが、誰かが朝の内に遊んだのだろう、あちらこちらに足跡がついている。

一人渡り廊下を歩いていたティーリが軽く嘆息すれば、冬の寒さに吐息が白く曇った。少しの距離を挟んで聞こえる、同じ年頃の領都学舎の生徒たちの声がどこか苦く感じる。

今は雪こそ止んでいるものの、空気は刺すように冷たい。風邪気味の身体には、それすら負担に思えた。

「ね、メイシャも午後街に降りない？ 授業無いし。街道も雪積もってるみたいだから、旅芸人の人たち、まだ出立しないで公演してるって」

「あー、ごめんちょっと無理。授業終わったら従妹とか、あとオルトとかと食事する約束」

「従妹ってチエイルちゃん？ じゃあ仕方ないか」

「旅芸人って花笛一座でしょ？ 私前に一回見たし、皆で行ってきなよ」

花壇を挟んだ庭の向こう、ティーリの歩くそれと並行して設えられている渡り廊下。そこを話しながら横切る少女たちがこちらに気づく前にと、少年は歩を速めた。

魔術師領領主の城の一面にある学び舎は、領都学舎と通称されている。

学舎には傍系や分家、姻戚関係にあたる者も含めたファーレン一族の子供たちが集っており、やはり魔術を中心に、彼らは勉学に励んでいた。

親元を離れて、準成人にあたる十四の歳までの八年間を、皆共に過ごす。学舎が構えられている場所が場所だけに、在学中は領主の城の敷地内の一角に設けられた館で共同生活を送るのだ。

加えて専属の人員が充実している魔術系統の学問の教師を除けば、常に彼らの近くにいる大人が少ない分、子供たちの結束は強く交流は盛んだった。

それが領都学舎の、同時にファールレンの子供たちの関係性。

そこに加われていないティーリだ。

体さえ弱くなければ。一年前のあの冬の日、《駒鳥》の召喚など成功していなかったなら。自分もかろうじて属せていたかもしれない、彼らの社会に憧れないと言ったら嘘になる。

けれど実際には除けられているのだ、ならば彼らの様子なんて見聞きすらしたくない。

少女たちが自分に気づかない内に、彼女たちから逃げるように。

足早に雪の掻き分けられた廊下を渡り切り、ティーリはその先にある大扉の向こう、図書棟へと足を踏み入れた。

「……やだ、な」

誰もいない廊下を歩きながら、ティーリはぼつりと呟く。

図書棟と呼ばれている書庫の多い城内の一角は学舎として割り当てられている棟にほど近く、こんな事も時折とは言えある。それは仕方のない事だけれど、いつまでも慣れなかった。

今のティーリにとって、師に勉強を見てもらっている時間以外は、ほとんどが一人で過ごし、一人で使う時間だ。

だから彼は書庫へはよく足を運ぶ。自分の失敗を取り戻すか、それとも無かった事にでもしてしまえる何かを探そうと。

その為には今のうちに、体調の悪いさを押して通う事も少なくはなかった。ティーリにとって、何か行動することも、逆に何も行動しない事すらも、無言で責められているように感じる。そんな中《駒鳥》の召喚を、自分の失敗を無かった事にする方法を探るのは、たった一つ自分に許された行為のように思えたのだ。

屋内を歩き、いくつかの扉の前を過ぎて馴染みの書庫の一つの扉を開けると、今日もまたティーリは書棚の間を彷徨い始めた。

書名に視線を滑らせ、ゆっくりと部屋を移動する。時に立ち止まり、興味を持った本に目を通していけばあつという間に時間が過ぎた。

そうして一刻ほどたった頃、だろうか。

目的の本は確保し終えたものの、室内とは言え暖炉の無い書庫で長い時間を過ごしたからか、体は冷え切っている。

念のため着込んで来たが、それでも寒い。

加えて集中から覚めてみれば、だるさとふらつきも感じた。自室を出てきたときは微熱程度だったが、もしや熱でも上がってきているのかと思い当たる。

ならば早く部屋に帰ってしまわないといけないと、ティーリは見繕っていた数冊の本を持って書庫から出た。帰りがけに書庫の扉の脇に置かれていた魔法仕掛けの羊皮紙に、自分の名前と書名を記して貸し出しの手続きを終える。

本を両腕に抱えて硬い石材の廊下をゆけば、ふらつきやだるさに加えて眩暈も感じた。借りすぎた、だろうか。本の重みで腕が痛い。だんだんと呼吸も乱れてくるのは、やはり不調のあらわれだろうか。一步一步の足取りが重く、廊下がやけに長く感じる。

そして庭の渡り廊下へ続く大扉が見えた頃、不意に均衡が崩れた。「っ、うわ」

疲労の所為だろう、かくりと膝が折れ、前のめりになる。膝が石材の床に崩れた事に慌てて、ティーリは咄嗟に右手を前に出し床についた。

屈みこむようにその場で蹲れば安定は取り戻せたが、けれど左手だけでは支えきれなかった本が、ばさばさと床に落ちて散らばる。

ぼんやりとした思考には、そんな些細な失敗すら落胆の理由になれた。

落ち込んだように軽く息を吐くと、少年は片膝を立てて蹲ったま

ま傍らの壁に寄りかかった。

本を拾わなければ、そして部屋に戻らなければ。

そう思いつつも体は重く、それを制御しようとする意志も熱に浮かされた今は弱い。

少しだけ、このままでいようか。僅かな時間、壁に体を預けたままで。ティーリはそんな思い付きに甘えたくなつた。

だって石材の敷き詰められた床は、体温の上がつているだろう身体にはひんやりと心地よかった。この通路を通るものも少ないだろうし、少しの間なら。そう思った。

「――ど、メイシャもオルト兄ちゃんも、もう行っちゃった!」

しかし唐突に開いた廊下の先の大扉の先から響いた子供の高い声が、そんな誘惑を許さなかった。

早い歩調の足音もこちらへ向かつてくる。走っているのだろうか。子供という事は、領都学舎の生徒か。ティーリは憂鬱に思いながらも、けれど動けないまま軽く俯いた。

気力がないし、体も重い。自分を氣遣う人間もいないだろうし、このまま蹲ってやり過ごそうと決める。

「大丈夫だよ、この前はオルトもお腹すいちゃってただけだよ」  
するとすぐに最初の声への返事が、ティーリの耳朵を打った。どうやらもう一人いるらしい。

どこか聞き覚えのある二人目の声は、幼い一人目の物に比べれば、少しばかり大人びて落ち着いたものだった。

領都学舎の生徒なのだろうから、それでもおかしくはないだろう。学舎の子供たちは結束が強い分、彼らの間に年齢や性別の垣根は無きに等しい。

俯いたままの顔に、左右の髪が落ちてきた。苛立ちと、沈む感情と、目にかかりかけた髪に軽く瞼を伏せると、ティーリはただ子供たちが通り過ぎるのを待った。

しかし彼の望んだとおりには、どうやらなつてはくれないらしい。  
「どうしたの!？」

驚いた幼い声とともに、石の床を駆ける音がこちらに向かつてきた。同時に大扉の閉まる音が響き、追いかけるようにしてもう一つの足音も移動する。

どうして、放っておかないのか。

苦くも不思議に思ったティーリの肩に、そつと手が置かれた。次いで「どうしたの？ 具合、悪いの？」と気遣う、二人目の声が間近です。

そこで気づいてしまった。聞き覚えのある声色に感じた既視感は、すぐに彼女が誰かを示した。

なんで。よりにもよって。

そう思いながらもティーリはすつと顔を上げた。そして我が身を守るように少女を睨む。

彼女にきつい視線を遣るのに、罪悪感を感じない。もう慣れてしまった。

「——だるいだけ」

眼前で膝をつき、心配そうに覗き込んでくるカヤにそっけなく返せば、彼女は驚いたように目を睜った。

当然だろう、ティーリが彼女を嫌いなと同じように、いや、きつとそれ以上にカヤはティーリを嫌っている。

「風邪だよ」

だって奪われた者が一番嫌い、厭い、憎むのは、いつだって奪った者であるはずなのだから。

わかつたらもう行け、という意味を込めて、ティーリは突き飛ばすように乱暴にカヤの腕を振り払った。

態度で示したティーリに、僅かに均衡を崩しかけたカヤは、床に膝をついたまま唇を引き結ぶ。

苦い物を堪えるような表情からして、きっとカヤは蹲っているのがティーリだとは思わなかったのだろう。多分他の誰かだと思って心配したのだ。

唐突に浮かんだその回答は、あながち間違っではないだろう。

だってカヤはいつもなら、ティーリの姿なんて見かければすぐに、俯くように視線をそらして足早に彼から離れる。

それはティーリも同じで、二人は互いに互いを避けあっていた。だからこそ、こんな邂逅は稀だった。まともに彼女の顔を見たのなんて、幾月ぶりだろう。

僅かに沈む感情に、ティーリは俯いたカヤから、彼女をきつく射ていた視線を逸らした。

「カヤちゃんに意地悪しないでよ、ティーリの癖に！」

けれど、そんな空気を不穏さと受け取ったのか、傍らからカヤを庇うようにもう一人の幼い少女が声を張り上げる。

他の子と同じように彼女もまたティーリを、『役立たず』の跡取りを嫌っているのだろう。

いや、多分それだけでない。

ティーリに向けられた幼い彼女の声色は、彼を蔑んでいるのは明らかだった。年上の子供たちをまねるように、見下してもいるのか。けれどそれは、あまりにティーリをみじめにさせた。

「別に何もしてないじゃないか、っ」

反射的に、ティーリは傷ついたように声を張り上げる。けれども途中でごほりと咳込んでしまい、最後まで言葉を発することはできなかった。そのまま二度三度と苦しそうに咳を続けるティーリを、若い少女は苦虫をかみつぶしたように見降ろした。

「意地悪、してるじゃない。あたしたちみんな知ってるんだから。カヤちゃんのこといつも睨んでるじゃない！」

その言葉にくしゃりと、自分の顔が泣きそうに歪むのがわかる。突き刺してくる言葉を払う余力もなく、痛みをこらえる余裕もなかった。

指摘し責めたてる彼女は、じゃあどうしてティーリがそんな行動をとってしまったているのか、僅かでも考えはしたのか、と。

そこまで配慮を期待するなど本当に身勝手だと思いつつも、そんな問いが一瞬彼の脳裏を過った。

自分の心中を慮るような人間などもう居ないというのに、縋るように期待してしまった。

わかっている。他人にそこまで自分をかまえと、願うべきではない事も。氣遣ってくれるかもなどと、夢見ることなど無駄なのだとそう堪えたティーリの心中など知るはずもなく、カヤもまた振り払われた手を庇うようにして、「いいよ、チェイル」と目をそむけた。

「そんなこと気にしてないから。——だって関係、ないよ」

何が、誰が、とも言わずに、カヤは冷たい石の廊下から膝を浮かせて立ち上がる。

どこか軽やかでさえあるそれは、しかし強い言葉だった。

その響き、そして熱に浮かされた意識は、たやすくティーリに包み隠されない感情を吐露させる。

「部外者のくせに」

言うべきではないし、言って傷を負うのはカヤだけでなく自分もだとわかっていながら。

若い少女——チェイルの手を取ったカヤに、ティーリは嗤うよう

に言葉を投げかけた。

「ファールの血統じゃないくせに、我が物顔で。馬鹿じゃないの、どうせそのうち排除されるのに。邪魔な荷物なんだから」

咳込んだ反動で粗く呼吸を繰り返しながら、それでも顔だけは上げてティーリは言い放つ。

ありったけの妬みと、嫉みと、どす黒い劣等感が込められた言葉。ティーリが投げつけた鋭い音に、カヤは傷ついたように唇を噛んで立ち止まった。

そしてしばしの逡巡の後、彼女は少年をきつと見下ろす。

「カヤちゃん？」

チェイルが彼女の手を引いたが、カヤは躊躇わなかった。

じわりと瞳に涙を浮かべて、少女は言葉を溢れさせる。

「私の所為じゃない」

感情をまるで爆ぜさせるかのように、カヤは鋭い声をティーリに向けた。

「こんな、ふうに、ここでこうしてなくちゃいけないの、全部あなたが！」

相変わらず壁に寄りかかりうずくまったままの彼を見下ろして、

彼女は叫びを振りかざす。

かと言って、カヤの声に僅かに表情を歪めたティーリをその刃で刺す事は、ついぞなかったけれど。

チェイルー、と。そして続いてカヤ、と。廊下の角の先から少女たちを呼ぶ声が聞こえた。

ティーリも聞き覚えのある少年の声。誰であったか、忘れてはしまったけれど、やはり学舎の生徒であろうとは察しがついた。

しかし近づいてくる足音は、一人の物だけではない。その事を一瞬不思議に思っただけを向いたカヤは、そしてティーリを責めたる機会を失った。

「オルト兄ちゃん」

「カヤ、チェイルも！ 何で来ないんだよ、俺もメイシャも随分待

って。おい、どうしたんだよ!？」

廊下をかけてきたオルトは、チェイルの声に速度をゆるめた。そして近づきながら、ティーリが相変わらず蹲っているのを、カヤの頬に涙が伝っているのを見て驚いたように言う。

カヤも自分の高ぶっていた感情に冷静さを取り戻したのか、慌てて袖口で目元を拭った。

苦い思いがティーリの心中を過った。

けれどそれも一瞬の事で、オルトと連れ立ってこちらに来ていたのだろうか。もう一人姿を現した男の姿を目に留めると、ティーリは一転、呆けたように困惑をあらわにした。

「オルト、二人は見つかったのか？」

ティーリと同じ焦げ茶の髪。けれど瞳の色は異なり紫。纏うのはファーレン一族内の序列で五位以内に入る事をあらわす、鉄色をあしらった衣服。

心配そうに言いながらこちらへ向かってきた彼は、少年がうずくまっていること、そしてそれがティーリだという事に気づくと、驚いて駆け寄ってきた。

「ティーリ!」

相変わらず壁にもたれかかったままのティーリの傍まで来ると、男は心配そうに「大丈夫か？」と彼に声をかける。

その様子に、オルトはティーリの方は構わずともいいと判断したのでろう。カヤ達に「何か、あったのか？」と尋ねた。

「え、っと」

「……風邪だつて、言ってたよ」

「風邪? ふうん」

チェイルがつつかえたカヤに代わって、躊躇いがちにオルトに答えるが、彼から返ってきたのは淡泊な反応だった。

長の息子の体調不良はいつもの事なのだから。子供たちにとっては、特別気にする事柄ではなかった。

けれど男にとっては、やはり気にかかる事であるらしい。その言

葉を聞いて、彼はカヤたちの方を向いて「すまなかったね」と口を開いた。

「風邪なら、うつってしまっただけじゃない。オルト達は戻った方がいいだろう。図書館を抜けるのにも時間はかかる」

「でも、エデイス様」

「ティーリには私が付き添うから。それに、メイシヤ達も待つているんだろう？」

少しばかり躊躇ったオルトに、エデイスは穏やかに言った。

「ティーリを厭う大人たちも多いというのに、彼の言葉はただ子供たちに対する配慮と心配だけで形作られている。」

「それも当然では、あるだろう。エデイス・ファールン。彼はティーリの父親なのだから。」

「そう、ですか？ ……じゃあ。チェイル、カヤ、行こう」

「え、あ、うん」

そう言ってチェイルの手を取ると、オルトはやってきた方へ歩き出す。

カヤもそんな二人を追いかけて、振り向きもせず去って行く。

そして、彼らが廊下の角を曲がって姿を消したころ、ティーリはゆっくりと、けれど少しばかり後ろめたそうに言った。

「なんで、居るの。王都じゃなかったの」

「ああ。出陣の報告と準備に為に、しばらく前から戻っていたんだ。でも忙しかったから」

「……聞いてないよ」

「すまないけれど、これも仕事だから。でも折角だからうちの子の顔を見ておこうかなと思ったら、部屋にいないじゃないか。随分探したよ」

ぽつぽつと言葉を繋げるティーリに、エデイスは足元に散らばる本を一冊ずつ手に取り、抱えていきながら丁寧に返していく。

ファアレンの謂わば代表者として王都に詰めている父と、ティーリはあまり接する機会が無い。

けれど中々会えない分、暇を見つけては何かと構ってくれる父が、ティーリも嫌いではなかった。

「体調が悪いなら、部屋で安静にしていなければ駄目だろう？」

だからだろうか、そんな言葉も自分を案じての事なのだと、含みなく素直に受け取れる。

わざわざ膝について視線を合わせてくるエデイスの言葉に、ティーリは「でも、本借りたかったし」と少しばかり俯いた。

「古い本ならもしかしたら、なんとか帰す方法も載ってるかも。それに帰すのが無理でも、早くどうにか追い出すか何かしたくて」

「——ティーリ」

「だって俺、あいつがここにいるの、やっぱり嫌だ。俺と一緒に、邪魔者なのに」

「やめなさい、ティーリ」

「でもそうでしょ？　そもそも俺やあいつが居なければ、ファーレンも余計な荷物背負い込まないでいられた！」

「ティーリ」

父は厳しく、ティーリを制した。

「やめなさい。そうではないよ、それは違う」

あいつ、というのがカヤを指した言葉だと、やはり伝わったのだろう。エデイスは以前からティーリもエデイスに対しては、心情を僅かではあったが零してはいた。

「それに嫌でも、嫌いでも、彼女がここに居なければいけないのは変わらない。君が召喚したのは、《駒鳥》とはそういうモノだ」

エデイスは硬い口調で言う。

「だってあいつ、誰とでもうまくやってるし、きっとここじゃない場所でも」

「例えそうだとしても、だ。彼女はここに居なければいけない」

床に散らばっていた本を全て片手に抱え、言い切ったエデイスはふいに、ぽん、とティーリの頭を撫でた。

「それにね、大切な誰かと別たれることは、本当につらいことだから」

その言葉に、ティーリは苛立ちを隠さず顔を上げる。

父ですら、ティーリを責めるのだろうか。今まで諫め、怒りこそすれ責めはしなかったのに。

「父様まで、そんなこと言うの？　俺があいつを召喚したから、俺があいつを家族から引き離れたから、俺が全部悪いって」

「そうじゃない。それにその事を言いたいんじゃない。——確かに、

ティーリが召喚したから、カヤは故郷や家族から引き離された。だからこそ彼女も苦い思いは味わっているだろう」

ついていた膝を床から離し、並行して座り込んだままのティーリを立ち上がらせようと、エデイスは息子の手を引いた。

そして続けた言葉に、ティーリは傷ついたように僅かに表情を変える。

父に手を引かれてふらふらと立ち上がれば、風邪特有の倦怠感に立ち眩んだ。

それでもエデイスは言葉を続ける。叱るでも責めるでもなく、ただ言い聞かせるように。

「でもそれだけじゃなく、今はここにだって、彼女を大切に思う人間がいる。——ユフィア姉さんから、あの子を引き離すのか？」

ユフィア。ティーリの伯母の名を、エデイス自身の姉の名を彼は挙げた。

夫を亡くして帰郷していた彼女がカヤの養母となったのは、そもそもは一族の長が彼女に頼んだ事が発端。

けれどそんな事を思い出させもしないほど、ユフィアはカヤを可愛がっている。もっともカヤはまだまだ彼女に対して、ぎこちなくはあったが。

ティーリも伯母が家族を亡くした当時の嘆き様はよく知っている。こちらは逆に少しではあるが、今の様子も。

「ずるいよ、父様」

「何とでも言いなさい。家族を悲しませる事は許さないよ」

ティーリが言葉を濁すと、エデイスはきっぱりと言い切り、大扉の方へ体を向けた。

「ほらティーリ、部屋に帰ろう。一緒に行くから。歩けはするね？」

「……うん、大丈夫」

彼が図書棟の二画から持ち出した本を小脇に抱え歩き出したエデイスを、ティーリはのろのろと追いかける。

「私は仕事があるから、明日の朝にはもう発たなければいけない。」

次に会えるのは早くても春だ。だから部屋に送り届けるまでしかできないけれど、きちんと眠るんだよ？」

歩調を合わせて、ゆっくりと足を進めながら言ったエディスに、ティーリはこくりと頷いた。

庭を渡って別の棟へ入り、幾つかの廊下を抜け部屋にたどり着いて、父と別れて。今回ばかりは言いつけ通りに眠ったティーリが、出立の前にエディスに会う事はなく。

そうして次に少年が父親と見たのは、予定よりも幾分早い——冬の盛り。

黒い文の形をとつてもたらされた、あまりに早い帰還の報は、魔術師領に衝撃を走らせた。

「伯母様。参りました」

伯母ユフィアから危急の知らせがある、と。眠っていたティーリが母の側近の侍女に起こされたのは、まだ薄暗い夜明け前だった。

彼女に理由も告げられず、けれど言われるままに手早く洗顔と防寒対策だけを済ませ、侍女に付き添われて自室を発った。

夜着から着替えたり、食事をとる暇すらなく、である。

こんなことは初めてだった。けれどそれほど重要な、急ぎの用事なのだろう。

普段自分に付いている使用人の青年ではなく、母の侍女が伝言を持ってきた事からもそれはうかがえた。

だから城内の一画、小さな棟一つを割り振られた伯母の住まいへも、躊躇いこそすれティーリはまっすぐに赴いた。

カヤがユフィアに引き取られてから、つまりはここ一年は足向着いていなかったそこは、幼い頃はよく訪れた場所である。

見覚えのある道筋に迷う事はなかった。そしてたどり着いた先の部屋の扉を侍女が叩いて来訪を告げ知らせればすぐに、彼らは室内に通された。

「ティーリ、久しぶりね。急だったけれど、不調そうじゃなくてよかった」

「……はい。伯母様もお元気——ではなさそう、ですね」  
「そうね。元気では、ないわね」

暖炉には魔法火が灯っており、暖かい。

ティーリたちが部屋に入ってくるとともに、炉辺の長椅子に座っていたユフィアは、彼らの方を向いた。

けれど目元は赤く、甥へと微笑んだ表情も、どこか悲しげなもの

だった。

彼女の傍らにはカヤが隠れるようにして座っていたが、ティーリは彼女にはちらりと視線を向けたただけですぐに逸らす。

以前父から諭された言葉も思い出したし、何よりユフィアは弱っているように見える。

そんな伯母の前で、必要以上にカヤと関わるべきではないと思っただ。ティーリにとってカヤへの接し方は、攻撃的になる以外は慣れない事だから。

それにしても、ユフィアの様子は常ならないほどに妙である。

早朝だから彼女も、またその隣のカヤも夜着に裾の長い上着を重ねているだけだし、髪もきちんとは整えられていない。

それは自分もそうであるのだが、いくら近い血縁であるとはいえ、このような礼を欠いた格好で集まるなど。

不思議に思ったティーリだったが、すぐにユフィアから「そちらの椅子にかけなさい」と示されたので、思案の時は続かなかった。

「ティーリも、カヤも。本当ならミレイア様が伝えるべきだけれど、ごめんなさい。あの方には今時間も余裕もないの」

「母様が、ですか？」

少年が椅子に浅く腰を下ろし、彼に付き添ってきた侍女が壁際に控えるのを確認すると、ユフィアが弱弱しくはあったが口を開く。

唐突に出てきた母の名前にティーリが首をかしげれば、ユフィアは「そうよ」と頷いた。

「ミレイア様は指揮も執って、指示も、出さなければいけないから」  
そうユフィアは零すと、一呼吸だけおいた。けれどその後は凛と背筋を伸ばし、重々しく子供たちへ続けた。

「序列四位、エディス・ファールンが身罷りました」

その一言に、しんと静寂が降り立つ。

一瞬彼女が何を言ったのか理解できず、ティーリがゆっくりと瞬間に、ユフィアは言葉を繋げた。

「あの子が、いえ。エディスが、メイキアとの国境で起こっている

争いを平らげる為に、出陣していたのは知っているわね？」

メイキア。隣国の名を知らぬ者は、さすがにこの場にはいない。  
この国と彼の国では今、南西の平原の国境線上で紛争が起こっている。

場所が場所だけに慎重に事にあたらなければならぬからと、  
確かに魔術師領軍は王命の下、長の夫であるエデイスに率いられて  
出陣していた。

それはティーリも父と最後にあつた日、エデイス自身から聞いて  
いたし、カヤも学舎での話題の一つとして知っていた。

けれど紛争はそこまで大規模な物ではなかったはずだ。一軍の長  
が死ぬ、など。

「どうして」

「三日前に、そこで争いの最中に。――奇襲があつて、背後から術  
矢で射られたそうよ」

ぽつりと零したティーリに、ユフィアは淡々と言った。

「昨夜、ミレイア様に宛てられた黒文の報せを見せていただいたわ。  
長様は、日が昇るまでにあなたたちにすべて伝えなさいと」

言いながら、彼女の目元が潤んでくる。

危急の報せは一般に、黒色の文でもたらされる。おそらく従軍し  
ていた一族の誰かが、戦地から長へと送ったのだらう。

そしてそれが、黒文を受け取った長ミレイアからユフィアへ。ユ  
フィアから今、ティーリとカヤに。

だからか。だから、こんな時間に、大切な用事が、と。

そもそもエデイスが普段常駐している王都から、魔術師領に戻つ  
てきたのは王命の一環で。それは出陣の準備と最後の報告のため、  
で。

……符号は、可能性は、低いながらもあつたのだ。

頻繁に王都から北の反乱の鎮圧へ、南の紛争の調停へと。戦闘を  
得意とはしないものの、地位ゆえに戦場へ多く赴いていたエデイス  
の、死の可能性は。

そう、どこか他人事のように父の死を受け止めたティーリは、瞳を見開いたまま無意識にこぶしを固く握った。

どうして。家族を悲しませる事は許さない、なんて。あの日言ったのは父であつたはずだ。だというのに、どうして。

ユフィアの隣で、カヤが「死んじや、亡くなつたつて、えでいさん」と、混乱気味に養母に問いかける。

「逝つて、しまったのよ。エデイスも」

夫を亡くしてから二年もたっていないというのに、今度は年子の弟を亡くしたユフィアの声は、あまりにも痛ましい。

ティーリはそれを意識の端に納めながら「とうさま」と、呆然と細く呟いた。

けれどまるで彼自身が凍ってしまったかのように、その感情は表には現れない。

「今から、服喪が始まるわ。衣食の形態が違ふし、忙しく、騒がしくなるから。あなたたちはエデイスが、エデイスの体が、帰つてきて。そうして葬儀が終わるまでは私の保護下に、と。長様のご指示よ」

言いながら、とうとうユフィアの頬に雫がつつた。

カヤが縋るように、慰めるように彼女の袖を握る。

唐突すぎる喪失に、受け止めこそすれ、受け入れられないその死に、ティーリはただ戸惑つたように視線を彷徨わせた。或いは、助けを求めるかのように。

そうして彷徨わせた視線が、不意にカヤの眼差しと重なる。

すぐに少女の目線は伏せるように逸らされたけれど、それでも一瞬。

不思議と、反射的に睨むこともなかった。ただ視線が交わり、今浮かび上がり侵食を続ける、いたみの感情を共有したような感覚に陥った。

苦しみの増す胸中に、ティーリが軽く俯くと、膝の上で握りしめた手が視界に収まる。ゆつくりと両手の感覚を手放せば、自然と固

く籠められていた力が抜けた。

遠くで、空気を震わせ音が響いた。

鐘の音だ。陽の上りゆく中、城の塔の鐘の音が、重く悼みの時を、弔いを領都に告げ知らせる。

傍らに控えていたはずのミレイアの侍女は、いつの間にか傍を離れていたらしい。

鐘の音と衣擦れ、そして視界の隅を横切った彼女の衣服の裾にテイリが顔を挙げれば、侍女の手には小さく真白い木の衣装箱が抱えられていた。

「喪服を」

その一言で、この信じがたい喪失に、現実の色がまた塗り重ねられる。

ユフィアも頬の涙を拭い取り、今度こそ毅然と顔を上げ立ち上がった。カヤも沈んだ面持ちのままそれに続く。

「午前の内には、弔旗が上がる手はずだものね」

そうすれば、城内のみならず領都中が忙しくなるだろう。

悲しみに浸る間もなく、きっとカヤやテイリも動かねばなるまい。何しろエデイスの、長の死した伴侶の、最も近い血縁なのだ。服喪と言う慣習は、時に儀式的な行動を必要とする。

ユフィアの言葉に、テイリもゆっくりと椅子から立ち上がった。左手でカヤの手を引いたユフィアが、そっとテイリの頭を撫でる。

幼い頃は、よくしてもらっていたその仕草が、テイリが最後に父と会った時の想い出と重なった。

「テイリ、カヤ」

そして彼女は子供たちに、そして自分に言い聞かせるようにゆっくりと告げた。

「――着替えなさい。喪が始まるわ」

弔鐘が響きだせば、もう認めきれずに困惑し、立ち止まってはいられない。喪った現実を、受け入れなければならぬのだから。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6574m/>

---

駒鳥（きみ）へ、優しい日々を贈ろう

2011年3月31日17時55分発行